

## 希望とは何か

2020. 1. 17

学校では、夢や希望、目標やめあてなどの言葉をよく使う。年が改まったこの時期に、「希望」について考えてみたい。

希望が前提として、当たり前のように与えられていた時代が、かつてあった。そんな時代には、目の前にある希望を叶えるべく一所懸命に働いたり、せっせとお金を貯めたり、新しいことに勇気をもってチャレンジしていくことができた。しかし、希望という前提がいったん崩れてしまえば、何のために、何をすればよいのかが、わからなくなってしまう。

現代は、誰にも希望が与えられているような時代ではなくなった。そんな時代に生きる私たちは、何を考え、どんな行動に踏み出していけばよいのか。

希望が持ちにくい時代ではあるが、それでも周囲には希望という言葉が日常的にあふれている。街でラーメン屋さんに入れば、「大盛希望の方、無料」といった、うれしい文字を目にすることもある。日本の音楽の詞や題名に「希望」という言葉を見つけるのは、むしろ楽しいことではない。

そもそも希望とは何なのだろうか。希望という言葉を見聞きすることはあっても、希望とは何かを教えてくれる人はいない。「若者に夢と希望を」といっても、何を若者が手にすれば、希望が得られることになるのだろうか。経済の停滞や累積する財政赤字などの重苦しい現実を前に、日本にはもう希望がないといわれたりする。社会に生きる多くの人が、希望はないと感じるようになった理由は、何なのだろうか。希望が前提でなくなった時代、私たちは何を糧に未来へ進んでいけばいいのだろうか。希望という、現代で最も重要かもしれないが、最もむずかしい問題。それを解明しようとする学問が必要なかもしれない。

日本の希望を考えると、やはり若い世代、未来に生きる世代が、希望を持てることが何よりも大事だと考える。そのためにはまず先に生きてきた世代が、自分自身が経験してきたことを、良いこともそうでないことも、正直に若い世代に話すことが大切である。そんな世代を超えた率直な対話ができるようになってはじめて、日本の希望は考えられるようになるという気がする。

能力や意欲の問題ではないにせよ、仕事に就くことができなかつたり、不安定な雇用状態にあつたりする若者の多くに共通して欠落している「何か」がある。その何かこそが希望ではないだろうか。彼らに欠けているのは、自分に対する希望、働くことに対する希望、社会に対する希望など、人によってちがいはあれ希望そのものだと考える。働くことや、ときには生きること自体に苦しさを感じている若者の問題に取り組むには、希望の問題を真正面から考える必要がある。

希望とは何なのか。希望はどのようにして生まれるのか。希望を持つことが何をもたらすのか。これらの問いに答えなど容易に見つからないことは、はなから明らかである。しかし、取り組まなわけにはいかないと思う。個人を取り巻く周囲や社会に、大切な何か欠けていることが、希望の欠如につながっていると考える。希望とは何か。この答えのない問いがこれからの命題となるように思う。

私個人としては、「希望」という言葉はあまり好きではない。「希な望み」と書く。どうしても叶うことのない、はかないイメージがつきまとう。明るい雰囲気を感じない。だが、それがないとやっていけない、生きていけないもののようにも感じる。これから卒業していく3年生にとっての希望とは、どのようなものなのだろうか。